

——人を殺してみたい、とはずっと思っていた。



は、と、自分の唇から熱い息が漏れる。人を殺すのは、自慰行為にも似ていた。興奮して、脳のどこから快樂物質が出ているのが分かる。いや、これは、オナニーなどではない。そんなものでは到底追いつかない、『気持ちよさ』だ。穰は女性経験がないが、それでも、これはきつとセックスに似ているのだと思った。口角が吊り上がって、ぶるぶると震える。俺は笑っている。穰はそれを理解していた。

銃を撃つたのは初めてだったし、人を殺すのも初めてだった。強要された殺人は、決して穰の本意ではなかった。驚き、慄き、穰もまた、悲鳴を上げた。

だが結局生き残ったのは、穰だった。

ふらつく足が、彼を床へ座りこませた。銃は、手のひらへ吸いついたように離れない。手汗がひどいのに、その重たい塊は穰の手のひらの中に当然のように収まっている。

俺以外誰も生き残らなかった——誰も、誰も。

バスの中は惨憺たる有様で、穰以外の人間は皆死んでいた。血に染まった車内は、鉄錆の匂いでむせ返っている。高校時代に解剖したあの蛙などとは比べ物にならないな、と彼は思う。

ふと、穰は、脇腹に痛みを感じて、自分の腹を触ってみた。服が破れて、ぬるぬるとぬめっている。俺の血だ。俺の。肉が抉れて、血が出ている。だが内臓は大丈夫だろう、おそろく。大丈夫でなくても知らない。知ったことではない。気持ち良かったのだから、きつと問題ないのだ。

だっておそらく、気持ちいいことは、正しいことなのだから。

「——ふ、ふひ、ひひひ」

なんだか笑いが止まらない。面白くて仕方ない。こんなに笑ったことは、これまで生きてきて一度でもあっただろうか。誰かが穰の腕を掴んだ。見上げると、知らない男が穰を見ていた。黒い目のアングロサクソン。誰だろうか、などと思っただけから、穰は思考を放棄した。これが誰かなんて知ったことか。そうだ、知ったことじゃない。男が穰を引き摺り起こして立たせ、他の誰かと何かを喋っている。英語だ、だが、わからない。穰は勤勉な方であったし、英語もできるが、今の自分はそれを理解することが出来ない。

引き摺られ、車に押し込まれる。どこかへ連れていかれる、知らないところへ。穰はこれからどこへ行くのだろうか、それはわからない。だが、きつといいところだ。きつともつと、ここよりもずっと本能に忠実になれるところだ。ならば、それはいいところなのだ。

だって、本能に忠実であることは、こんなにも気持ちいい。

父親も、母親も、本能を抑えつけて穰を育てた。何かの宗教のように健康や潔癖な生活を崇拜して禁欲的に生きようとする両親は、度々穰を激しく躰けた。たとえば幼い頃、友達からもらって食べたソーセイジが美味しかったと報告したら、めちやくちやに殴られて風呂桶の中に一週間閉じ込められた。殴られ過ぎて熱が出ていたが、肉など食べたからだと放置された。その時の寒さと悪夢を、穰はまだ覚えていてる。たとえば中学時代、同級生から金を借りてファーストフードに行ったことが捨て忘れていたレシートからばれて、足の骨を折られた。その時の痛みと自分の悲鳴を、穰はまだ覚えていてる。たとえば高校を卒業する時、後輩の百合と言う女に告白した。結果はあえなく振られてしまったが、なぜかこれまで両親にばれていて、危うく去勢される場所だった。包丁を握る母親の顔を、穰はまだ覚えていてる。その他にも、色々なことをされた。そしてその度、彼らは言うのだ。お前は頭がおかしいと。だから穰はずっと、自分がおかしいのだと思ってきた。この二十年間、ずっと、ずっと。

だけど、俺は変じゃなかった。

自分はおかしくなどない。穰はこの血まみれの空間に辿り着いて初めて、それをはつきりと認めた。自分はおかしくなどない。おかしいのだとしたら、彼らだ。本能を理性で抑え込んで快樂を失うことを選んだ彼らだ。快樂を求めることが悪であるなら、人間はどうして栄えたと言うのだ。孕むことを是としながら、それに至る快樂を否とする人種など滅んでしまえ。育つことを是としながら、それに至る快樂を否とする人種など滅んでしまえ。

快樂こそが正義だ。全てだ。肉の快樂に、肉の本能に忠実たれ！

そんなことを考えながら笑っていたら、新しい銃が渡された。気が付けば、知らない場所に辿り着いていた。どこだろう、と、反射的に思った。だがすぐに思い直す。どこでもいいじゃあないか。どこだって変わらない、銃があるのなら、さっきのように殺さなければいけないだけだ。それにどうせ、この異国の地じゃ自分はどこに行つたって異邦人だ。

車から放り出されて、ぼんやりと、俺は死ぬかもしれない、と思った。

ならば、一人でも殺してみよう。

快樂の絶頂で、死んでみせよう。

へらへらと笑いながら、穰はその建物へ足を踏み入れた。



なんか使えそうなのが来た。

その男を最初に見たアレックスの感想はそれだった。死体の始末の話でたまたま来ていた

お偉いさんのところに、よくわからない血まみれの東洋人が突っ込んできたのだが、これが何か完全にキマっている顔をしていた。葉やらなんやらのせいではないと明らかにわかる、『天然の狂人』の顔であった。こんな人間、そうそうお目にかかれるものではない。

こんな——誰にも愛されたことのない顔をした人間は。

なので、つい、本当について、アレックスは、その東洋人を咄嗟に殴り飛ばして気絶させたのだった。ひよろひよろと上背ばかり大きくなった東洋人は簡単に吹っ飛んで壁に頭から激突して動かなくなつた。気絶した東洋人が銃を持っていたのを見て、案の定お偉いさんは色々と言ってきたのだが、適当に言いくるめて——もつとも、これで自分の命は多少危なくなつてしまつたが——助けてしまつたのだ。

無論、自分の悪癖は知っていた。俺はみじめじゃない、俺はまともだ、俺より下なんてたくさんいる。それを自覚したいがために、自分より哀れそうな状況の人間を拾つてしまう己の悪癖を、アレックスはきちんと知っている。この前は、行きずりに小さな娘を拾つた。結局死んでしまつたが、あれは可哀想な娘で、アレックスのみじめさをひどく慰めてくれた。あれが生きていれば、おそらくこれは捨てていただろうと思う。

それに、使えそうだと思つたのは、嘘ではない。狂人は何をしてくすかわからないものの、狂人であるからこそなんでもやる。それは、アレックスのやっている仕事において、非常に有用な資質であつた。

死体を始末するのに、正気は要らないのだと、彼は思っている。

子供の頃、死体を漁つて金品を盗む癖がついた。十三の頃、死体を解体したりすることで生計を立てるようになった。両親は十の頃には既にいなくなつていた。アレックスは捨てられたのだった。

誰もいなかった。アレックスの周りには、誰も。

恋人も作つた。だが、いつも決まつて、捨てられる。あなたは私を見ていないと。それは道理だと思つたので、いつしか彼は恋人を作ることを諦めた。

自分のような人間がたくさんいることを彼は知っている。自分だけが不幸なのではないと知っている。アレックスはそこまで子供ではないし、現実に夢など見ていない。だが、どうしようもないのだ。

愛されたことがない記憶が、アレックスを縛つて、解放してくれない。世界を、自分を愛せない自分に対する嫌悪感が、彼を苛む。分かっている、理解している。それなのに、みじめでたまらなくなる。夜を歩くたび、泣き叫びたくなるほどのみじめさで死にそうになる。愛される人間が羨ましくて妬ましくて、吼えたくなる。それが嫌で、誰か可哀想な人間を見つけては、己を慰めてしまうのだ。

今回のように。

「……俺は、みじめじゃない」

そう口に出すと同時、後ろ手に縛って転がしていた東洋人が目を覚ました。ここはどこだ、と東洋人が言った。英語だったので、「ここは俺の『うち』だよ、チャイニーズ」とだけ答える。だが、東洋人は、俺はジャパニーズだボケ、と吐き捨てて、「腹が減った」と訴えた。その、恐れのない言葉に、アレックスは笑う。

「何が食いたいんだ、ジャパニーズ」

東洋人は、アレックスの言葉にこう言った。顔を裂いたような、狂人の笑みを浮かべながら、真っ赤な舌を見せて、こう言った。

「肉だ。肉ならなんでもいい——なんでも」



——人を殺してみたい、とはずっと思っていた。

穰は、両親の死体を解体しながら、狂おしいほどのその欲求が満たされたことに狂喜した。もう両親は穰に口出しをしない。穰は自由なのだ。正真正銘、自由なのだ。

万歳、と、穰は高らかに叫んだ。



——人を殺してみたい、とはずっと思っていた。

アレックスは、ぐちゃぐちゃになった穰の死体の写真に、胸に去来する様々な感情を噛みしめていた。煙草が不味い。きっと、虚しさしか残らないのだろうと彼は思った。

畜生、と、アレックス——穰称する『夜鷹』は天を仰いで呟いた。

それから、また新しく犬を拾わなくては、と思った。

近々死ぬだろうという気がしていた。最近の自分は、勝手なことをし過ぎた。だがそれならば、余計に新しく拾ってこなくてはならない。

自分はみじめではないと思いつながら死ぬために。

死ぬ最期の瞬間に、せめて少しは救われたと笑って死ぬために。

……見つかる気は、しなかったが。しかしそれでも自分はそうしなければいけないのだ。

浅ましいな、とアレックスは自嘲を浮かべた。そうして、煙草を灰皿へ押し付けると車のドアを開けたのだった。